

山里の異変

旧額田町合併10年

災害対策 手入れ急務

台風16号の影響で県内を豪雨が襲った今月二十日。岡崎市千万町の乙川上流も激しい濁流だったが、雨がやみ、十分もすると水位はみるみる下がった。町総代の荻野保吉さんは「下流は水があふれるのでは」と心配した。

かつては大雨が降ると、川の水が減るまでに二、三日かかったという。森林が荒れて光が差し込まなくなった地面には下草が生えない。表土が流れ落ち、山の保水力が低下するため、雨水は一気に川に流れ込む。

八月末には、形埜地区の民家で簡易水道に使う沢の水が枯渇する騒ぎも。六十代の男性は「数十年住んでいるが、こんなことは初めて」と驚く。林業の歴史が長い額田地区。旧宮崎村の村長だった山本源吉(一八五二―一九三二年)は一九〇四(明治三十七年)、山焼きで、はげ山になった土地を豊かな森に変えよう

② 森林の保水力低下



「山が荒れると、都市部も危険にさらされる」と喜寿を過ぎても山仕事を続ける山本恵一さん＝岡崎市木下町で

と、百年先までの綿密な造林計画をつくった。針葉樹のスギ、ヒノキだけでなく、手入れがいらす、動物の餌となる木の実を落とす広葉樹も植えるなど持続可能な山づくりを構想した。だが、戦後、山主は高く売れる針葉樹ばかり植え山本の計画は忘れ去られた。六四木が転がる山が目立つ。額田地区の森林を調査して

(昭和三十九)年、木材輸入が自由化されたのを機に価格が下落。林業は衰退し、山の手入れはおろそかになった。現在、岡崎市内の人工林の四割近くが十年以上、間伐されていない放置人工林といわれる。密集して生える樹林は根の山に目を向けるべきだ」と主張する。

市内でも二〇〇八年に伊賀きた東京大大学院農学生命科学研究所の蔵治光一郎准教授(五〇)は「沢の水が枯れるなどの異変は、森林がかなり危険な状態にある証拠」と指摘。この先十年で、さらに林業の担い手は減るとみられる。「山主個人で森を管理する仕組みはもう限界。集落単位の共同管理など新たな方法を真剣に考えるべきだ」と話している。

メモ 岡崎市の森林は約6割がスギ、ヒノキなどの人工林。特に戦後の拡大造林によって植林され、50～60年ほどたった木が多く、間伐が急務。市林務課の調査では間伐の必要面積は約7800㌦。今の作業ペースでは、間伐を終えるのに30年以上かかるという。間伐された木材の8割は利用されず、山に捨てられている。